

第2節 1991年度板野郡同和教育研究大会公開授業

1 自らを語り合った家庭訪問

板野中学校での2年目、私は3年B組（1991年度）を担任する。進級してまもなく行なわれた家庭訪問において、本音を語り合う部落問題学習が土台となり、おのずと家庭訪問の内容も今までとは違っていく。必ずそれぞれの家庭において部落問題について語り合うようになっていった。

この4月の家庭訪問のときに、2人の生徒が初めて部落出身であることを自覚するようになる。そのとき私は、社会的立場の自覚は小学校の高学年までにしっかりと自覚させたいとしみじみ思う。

部落差別の蔓延する社会において、生徒たちの中に生まれてくる部落のイメージは、マイナスのイメージがどうしても強い。部落の人たちは可哀相な人たちという意識が先行していく。その可哀相と思ってきた人たちが、自分であったと知らされたとき、そこに大きな衝撃が起こっていく。4月の家庭訪問で自らの立場を自覚した2人がまさしくそうであった。

一人はC子である。涙が溢れ、家庭訪問の間中、とうとう涙は止まらなかった。その涙の底にあるものが、まさしく部落差別そのものだということと、差別の厳しさを痛切に感じていった。去年『私の目をみて！』の授業のとき、「先生が『部落の人間として絶対差別を許さん生き方がしたい』と言ったとき、C子はどう思った」という私の問い合わせに「そんなん関係ないと思った」と口にするが、自分のこととなると涙が溢れていく。まだまだ本当の意味での部落問題学習はできていないことを思い知らされる。私は教育記録にこの日のことを次のように記している。

【昨年度2年B組で部落問題学習に取り組む中、部落問題に対する憤りは育っていった。しかし、自分にとって部落問題が何であるかという学習、社会的立場の自覚をさせていなかったため、中学3年の家庭訪問で初めて自分の立場を自覚した。部落差別は許せないと、すばらしい生き方をつかんでいくんだと思っていたC子であったが、涙がとめどなく流れてきた。あの涙を怒りの涙、人間としてのあり方を求めていく熱い涙に変えていく嘗み、それがこの1年の嘗みである。】

もう一人は、H夫である。H夫のことも、その日の教育記録に次のように記している。

【H夫も家庭訪問の日までは、自分が対象地区生徒であるとは夢にも思っていなかった。私の言葉で自分が対象地区の生徒であることを知ったH夫は、涙こそ流さなかつたが、目はうつろになりその瞳は焦点を失っていた。私の「つらいか」という問い合わせに、一生懸命首を横に振って見せるが、今まで滑らかにいろんな思いを話していた口は固く閉ざされてしまった。今まで全体学習で発言してきた思いは何だったのか。部落の仲間と共に頑張っていくと多くの仲間と思いを交わし合ったのに、自分がその部落の人間であると知ったとたんに言葉を失い、何かに絶望したように動搖していく。今まで生徒たちに生きる力をつけていく部落問題学習をやっていくんだと言い続け、実践してきたことは何だったのか。H夫の動搖し悲しみの色を隠せないうつろな目は「先生、助けてください」と訴えているようだった。】

私は、この2人の家庭訪問のことを忘ることはない。その家庭訪問の日からまた新たな取り組みが始まっていく。学年全体は部落問題を自らの生き方の問題として捉え、本当の思いを語り合う部落問題学習の嘗み。3年生での全体学習も私たちの予想をはるかに越えて熱を帯びていく。

2 自らを綴った主題設定の理由

そんな部落問題学習の高まりの中で、1学期も後半に入った6月25日、板野郡同和教育研究大会の日を迎える。その日の授業は、学年それぞれのクラスが、『ふるさと』の詩を書かれた丸岡忠雄先生の講演記録『同和教育への希い』に取り組んだ。部落差別の中を「かくすことから名のことへ」と自らを変容させていった丸岡忠雄さんの生き方を学んでいく学習である。

私はその授業に関わって指導案の主題設定の理由に、私の精一杯の思いを綴った。それは以下の内容である。

【生きることの意味を一人一人の生徒と共に求めていきたい。これは私の願いである。それはすべての生徒の願いであってほしい。一人一人の生命は掛け替えのないものだから、力の限り美しく生きようと中学校最終学年のスタートを切った。

4月の学級開きの日より、私は生徒一人一人がいつか差別解消の主体者として常に美しい生き方を創造し、自らの生き方あり方に誇りを持って一人一人の人生を生き抜いてほしいと願い、部落問題学習に寄せる私自身の思いや願いを語りながら、人間としての生き方について問い合わせてきた。

最終学年のスタート、2年生より始まってきた学年全体による部落問題学習に寄せる思いを語り合う授業を通して、生徒たちは本音の部分を語り出した。それは今まで漠然としか見えていなかつた部落差別の厳しい現実を見せつけられることになった。私は同和教育とは、生徒たちの命を大切に守り抜き、一人一人の命を輝かせていく営みであると考えている。それはまさしく闘いである。西口敏夫先生の詩『よろこび』を幾度も反芻しながら、私は私自身を励まし続けてきた。

よろこび

西口 敏夫（『水平社宣言讃歌』より）

部落で生まれ、

部落で育ち、

部落でくらし、

運動と教育にいのちをかけて60年。

或るときは、烈火の叫びとなり、

或るときは、草にすだく虫の声となり、

或るときは、鋭く差別の事実に迫り、

或るときは、静かに差別の矛盾を訴えた。

このみちは、きびしい荊の道なれど、

この道はわが生涯のつとめなり。

ゆくさきは、幾多迫害ありとても、

この営みは、わが終生の、運命なり。

しかし、この営みは、

わが生命の生きがいにして、

わが生命のよろこびなり。

全学年が一丸となって取り組んでいる学年全体学習の度に生徒たちの中から、差別の膿が吹き出してきた。それは対象地区の生徒にとって、自分がこれから歩んでいかなければならない道をみせつけられることであり、人間としての生き方に目覚めていくことでもある。対象地区外の生徒にとっては、自分自身の意識の底にあった自分の醜い部分、自らの差別意識をみせつけられることである。

そんな苦しい思いの中にあっても、生徒は自分をさらけ出しながら自分自身と闘おうとしている。その姿に触れるとき、私は共に苦しみ、自分の力のなさをあやまり続けながら、共に自らの思いをぶつけていくしかないと思った。

3年全体で5月、すでにすべてのクラスが公開討論の桧舞台を経験した。堂々と自分をさらけ出しながら、自らの思いをぶつけ合う生徒。仲間の訴えの中で必死に涙をためて必死にうなずき応えようとする生徒。そんな中にあって、まだまだ本物になっていかない生徒の姿もある。そんな生徒に対し、怒りをぶつけ、時には優しく、時には厳しく諭していく生徒の姿がある。

そんな仲間の思いに応えるかのように、対象地区の生徒が自らをさらけ出して訴えていく。その思いに応えようと地区外の生徒が涙をこらえながら、その苦しく揺れる胸の内を語っていく。この部落問題学習は、お互いの存在、人間としてのあり方、生き方を確かめ合うものであった。部落問題学習があった翌日に記されていた生活ノートの一部を紹介する。

『今日の道徳の時間、すごくつらかった。AさんやBさんが言っていた言葉の一つ一つが心につき刺さった。Aさんが泣いていたとき、僕はその気持ちが手にとるようにはっきりとわかった。僕も、部落にかかわることをよく聞いていたからだ。そのとき、僕も手を挙げて発表しようと思った。僕の手は震えていた。今までの部落にかかわる話やいろいろなことで頭の中がグチャグチャになっていた。僕は手を挙げた。先生が僕を指名した。僕はちょっと話しただけで涙が出てきた。AさんやCさんが泣いた理由がはっきりわかった。僕はもっと話すつもりだったけど、言葉が出てこなかつた。これ以上話するのが本当につらかった。思い出しただけで涙が出てくる。自分でもなんで涙が出てくるのだろうかと思った。これからは頑張ってちょっとずつでも発表していこうと思う。道徳の時間が終わって、D君とE君がきた。E君は「自分は部落の人間だ」と言った。そして、「部落の人が悪いんと違う。差別する人が悪いんじゃ…」と言った。僕はなんかうれしかった。こんなことを言ってくれる友だちがいることがうれしかった。』

まだまだ本物の部落問題学習への道は険しく、挫けそうにもなる、倒れそうにもなる。そのとき、私を励ましてくれるのは、私と共に生きることの意味、人間としての生き方と共に学びながら差別解消に向けて頑張ってくれる生徒たちの誠実なまなざしであり、生き生きとした笑顔であり、人間としての輝きである。その道が、どんなに険しくとも、その歩みをやめることはない。その道が困難であればあるほどに頑張る力も大きくなる。そんな思いの中で今日までの営みを続けてきた。

私は、私自身が信頼する生徒たちと、丸岡忠雄さんの生き方を学んでいった。丸岡さんの生きざまは私自身の生き方に大きな影響を及ぼしている。高校3年生のとき、私は初めて『ふるさと』の詩を知った。

ふるさと

丸岡 忠雄

“ふるさとをかくす”ことを

父は

けもののような鋭さで覚えた

ふるさとをあばかれ

縊死した友がいた

ふるさとを告白し

許婚者に去られた友がいた

吾子よ

お前には

胸はってふるさとを名のらせたい

瞳をあげ 何のためらいもなく

“これが私のふるさとです”と名のらせたい

(詩集「部落」－五本目の指を－より)

こんな詩を著わすことのできる人が存在することがたまらなくうれしかったことを覚えている。そして、その詩を手帳に記し、自らを励まし続けた学生時代があった。その頃『ふるさと』の詩は私自身の心の支えであったが、私自身の生き方にはなっていなかった。

教師となった3年目、丸岡さんの著書詩集『部落』の中にある『意識の芽ばえ』という作品に出会う。これはまさしく自分のことだと思った。そして、そのとき手に入れた丸岡さんの講演のテープ（その講演が本資料『同和教育への希い』である）を繰り返し繰り返し自分の心に刻みつけるよう聞き続けた。うれしかった、このような人が存在することがうれしくてたまらなかった。心の底から勇気がわいてきた。部落差別には絶対に負けないと思った。

その講演テープ、すなわち丸岡さんの生き方との出会いが、私が私のすべてをぶつけて取り組む同和教育のスタートとなっている。そして、その年の8月、60数年前全国水平社の創立大会が開かれた京都（岡崎）において、私は佐藤文彦先生に丸岡さんを紹介していただいた。「丸岡です。（同和教育）頑張ってください」という丸岡さんの声、そのときの丸岡さんの姿は、今も私自身の生き方を励ましてくれる。

私の心の支えであった丸岡さんの講演テープをその年、佐藤文彦先生が原稿にされた。その講演記録『同和教育への希い』を私の掛け替えのない仲間である板野中学校の生徒と共に学んでいきたいと思った。

丸岡さんの生き方を学ぶことを通して、対象地区の生徒たちにどんな道が待っているか人間を尊敬し、親たちの生きざま、部落の先人の生きざまを誇りとして生き抜く力を育てていきたい。また、対象地区外の生徒たちには、この学習を通して部落の仲間の悲しみ苦しみを自分の胸の痛みとして捉え、差別解消に向けて生き抜く力を育てていきたい。丸岡さんの生き方を学ぶことは、対象地区の生徒にとっても、対象地区外の生徒にとっても、人間としての誇りうる生き方を求めるこ

とだと思う。

丸岡さんが、気高く、清く、高らかに唱い上げた『ふるさと』の詩をはじめとする数々の詩に寄せて、人間として美しく生きるとはどういうことか、誇りうる生き方とはどういうことを考えさせたい。

自らを誇り人間として生き抜くことは、苦しく、険しい、まさに莉の道である。しかし、その生き方こそ、人間として真実を貫いた誇りうる生き方であることを、丸岡さんの生きざまから捉えさせたいと願い本主題を設定した。】

この指導案、主題設定の理由を書いたとき、学年主任の仁木眞之先生が言った。

「森口先生、この指導案、見に来た全部の先生に出すん。これ読んだら、先生が部落出身の先生であると宣言したことになるよ。」

私は答えた。

「仁木先生、自分がこのことを明らかにしていかんと、本物の同和教育にはなっていかんし、差別をなくす生き方も確かなものになっていかんと思うんです。」

そんな話をしたことを覚えている。

その翌日の職員朝会のときに、仁木先生が板野中学校全体の先生方に次のような話をされた。
「森口先生が、部落出身を宣言する先生の本当の思いをぶつけた指導案を書かれています。先生方、森口先生の思いを受け止めて、この取り組みをもっともっと確かなものにしていきましょう。」

そして、3年の先生方には、「我々も森口先生の思いを受け止めて、もっと確かな指導案を書きませんか。主題設定の理由を書きませんか」と語り、3年の先生方の思いを高め、盛り上げていかれた。それが6月25日の高まりになっていく。

一つのクラスだけがいくら頑張っても、一人の教師だけがいくら頑張っても、それは確かな結果にはなかなかつながらない現実がある。私たちに問われているのは、共に頑張る仲間をつくり、仲間と連帯していくことにある。多くの先生方とその営みを確かなものにしていくことが、常に問われていくのである。

3 仲間との絆を深める語り合い

板野郡同和教育研究大会の公開授業は、私たち教師集団のつながりが生徒一人一人の学習の確かな高まりにつながっていく。私はこの公開授業が、板野中学校における人権・部落問題学習のスタートだったと考えている。

私の「信じ合い、何でも話し合える仲間がいたから、堂々と差別解消に向けて自分をぶつけていくことができたと言われる丸岡さんに寄せてみんなはどんなことを思いますか」という発間に、対象地区生徒のJ子が、その思いをクラスの仲間にぶつけていく。

「私は3年生になるまでは、自分が部落出身であることを絶対かくしていこうと思っていました。でも、いろいろな資料を勉強し、みんなの意見を聞いて、その言っていることを本当だと信じたとき、この仲間だったら私の一番つらい思いを打ち明けることができると思うようになってきました。」

今、私は二人の友だちに自分が部落出身だということを打ち明けています。まだ二人しか本当の友だちはいないけど、これからはもっとたくさんの本当の仲間を増やしていきたいです。」

この発言に打たれ、一人の女の子が祈るように手を挙げた。そしてJ子に応えていく。

「私もJ子さんにそのことを打ち明けてもらったんだけど、自分の一番苦しい部分を打ち明けてくれたんだから、私も心を開いて頑張っていかないかんと思うようになってきました。今、まだ二人にしか言えなかつたかもしれないけど、もっとクラスの中の人たちがJ子さんの気持ちを受けてみて、みんな今の時間を大切にしてほしいと思います。」

その二人の発言に応えて、もう一人の対象地区の生徒M子がその思いをつなげていく。

「今、3年生でも、何人かの人が、自分が部落出身ということを全体学習なんかで言ったんだけど、今、J子さんが二人だけと言ったけど、ここにいる3Bのみんなの前や多くの先生方の前で言えたんだから、信じてくれたと思いたいです。私も部落に生まれたんだけど…。」

この発言は、本当に重いものだった。こみ上げてくる。自らを語るということは本当につらいことである。それでも一生懸命に「なかなか言えんかった…」と言い、涙をこらえながら、最後はこう締め括った。

「このクラスの子だったら、信じることができるからこのことが言えます。」

この涙の発言は、クラス全体に震えるような怒りを沸き起こしていく。この発言にE子が次のように応えていく。

「J子さんとM子さんが言ってくれたけど、これから今日打ち明けたことを後悔するようだったら、私やはいったい今まで何をしてきたんだと思ってくれていいと思います。私も部落ということを言った子を変な目で見ようなんて一つも思っていないし、見たらごつい自分があほらしいなってくると思います。それで、この前読んだ本で心に残っていることなんだけど、一応世間で言う親友とは、親しい友と書いて何でも話し合える友だちということだけど、本当の親友とは、心の友と書いて自分の恥ずかしいところでも、何から何まで端から端まで話し合える友だちを心友というそうです。私もそんな心友をたくさんつくりたいです。」

こんな仲間と発言を噛みしめるように、家庭訪問のとき、初めて自らの立場を自覚し、悲しみの涙を流し続けたC子の手が挙がった。思わず私は、「C子」と指名はしたが、やはりC子の目には涙が溢れていった。涙で涙で声にならない。そんな状況の中にあっても、C子は必死に語ってくれた。

「私も部落出身ですが、このクラスのみんなだったらこのことが言えると思います。この前友だちに自分が部落出身ということを打ち明けたら…。『ほんなん関係ないでえ』と言ってくれました…。私は本当の友だちがいたんだということがわかつたのでよかったですなあと思いました。」

この発言はなかなか言葉にならなかった。しかし、このC子の発言は、静まり返った教室の中に、静かに響いていく。私にとってこれほど感動的な発言はない。私は必死にC子の言葉を受け止めていた。家庭訪問のときのC子の姿と、涙を流しながらも精一杯に思いを語るC子の姿が、何度も何度も私の頭の中を駆け巡っていくのである。

そのC子の発言は本当に強烈だった。必死にC子を支える地区外生徒の発言が続く。この後も、対象地区の生徒が起ち上がり、それを支える発言が繰り返されていく。そんな中で、もう一人家庭

訪問で初めて部落を自覚したH夫が、思いをぶつけていく。指名したとき、もうすでにH夫の目には涙がいっぱいだった。H夫は語った。

「僕も部落の人間です。今までこのクラスにもそのことをわかってくれる友だちはいないと思っていたけど、『みんないいなあ』と思いました。森口先生に家庭訪問の時に『お前は部落の人間だ』と言われたとき、自分には差別意識がないと思っていたけど、実際にありました。それで、この授業では泣かないと思っていたけど泣いてしまいました。これからこれをバネとして部落解放の道に進んでいって、気軽に部落の人間と言えるような社会をつくっていきたいです。」

この授業はまさに本当の思いと思いを重ね合った授業となっていました。そしてこの授業の次の日、家庭訪問で涙を流し続けたC子が、次のような生活ノートを記してきた。

【私は今日の発言で、部落のことが恥ずかしくなくなりました。もう何のこだわりもありません。発表している時は、自分で何を言っているのかわからず、涙が出てきたけれど、S子さんやJ子さんが発表したのに、私だけ黙つとってもいけないなあと思っていたんです。そしたら、自然と手が挙がったのが不思議でした。心臓はドッキンドッキンと破裂しそうだったけど。私の発言の後、C子さん、O子さんたちが言ってくれ、ほっとして発表してよかったですなあと思いました。泣くのは今日で終わりにします。M夫君とか、T子さんとともにみんなの涙は見たくないと言っていたし。今日の授業で私は、多くの人に支えられているなあと実感しました。みんな信じ合える仲間です。】

板野に生まれたこと、部落に生まれたこと、まだまだ不安とかがあるけど、私は強い人間になりたいです。「歎くより怒ることだ」を胸に刻んで…。今日で新しい道が開けたような気がします。今まで「学習会の通知やもらいたあない」と歎いていた自分がばからしくなりました。これからも学習会に参加していきたいし、どんどん学習していきたいです。いつか絶対絶対差別がなくなっていると思います。何か、楽しみです。とにかく、今日の授業、忘れられない一日になりそうです。うれしかった。よかった。(今日の授業の)ビデオ貸してください。】

最後に記してあった「ビデオ貸してください」という言葉、とてもほのぼのとした気持ちになつた。「C子、自分の泣いたビデオ見たいか」と言うと、C子はしっかりと「見たい」と答える。

救われるような思いだった。本当にこの子と出会えてよかったですと思った。泣きながらも自分が発言する姿を繰り返し繰り返し母親といっしょに見たそうである。家庭訪問の頃は、「何で私をこんなところに生んだのか」とお父さんやお母さんの顔を見るのも嫌だったというC子が、その自分の泣きながらも必死に語る姿を何度も見たのである。

以下、そんな生徒たちの目覚めや立ち上がり、つながりを深めていった授業記録である。

【授業記録】1991年度板野郡同和教育研究大会公開授業

主　題 「誇りうる生き方を求めて」

資　料 「同和教育への希い」詩『ふるさと』（丸岡忠雄）

1991年6月25日(火)第5校時

徳島県　板野中学校3年B組

授業者　森 口 健 司

1 まわりの環境が、部落に生まれたことを恥ずかしいように思わせていた

T 1：丸岡忠雄さんの資料をみんなで勉強してきたわけですが、今日は丸岡さんの生きざま、生き方に寄せる思いを語り合いながら、私たちの生き方、あり方を考えていきたいと思います。非常に蒸し暑い中ですけど、みんなの思いがふくらんでいく1時間にしたいと思います。

T 2：丸岡さんは部落問題を学ぶことによって、「かつて部落に生まれたことを恥ずかしいと思っていた。そのことが恥ずかしいと思うようになった」と言われています。その丸岡さんの思いについて、みんながこの学習の中から思うことを発表してもらいたいと思います。

SN(女)部落がどのような理由でできたのか。今までどうして差別され続けているのか。しっかりと学習する機会がなかったからだと思います。私たちは今、学校で部落差別について学習しているけど、昔は学習する雰囲気でなかったからだと思います。

MM(男)丸岡さんが部落に生まれたことを恥ずかしいと思ったのは、やはりまわりに負けてしまいそうな差別があったからだと思います。部落問題を学ぶことによって丸岡さんは本当の自分の生き方というものを見つけることができて、恥ずかしいと思うことが恥ずかしいことだと、丸岡さんは気づいて、自分の間違いを正していくことができる人になったからすばらしいと思います。

YI(女)私はどうして部落に生まれたことが恥ずかしいのかわからないんですけど、やはり差別があるから恥ずかしいと思い込まされているんだと思うんです。もしかしたら、私も板野に生まれたことが恥ずかしいと思うようになるかもしれないけど、板野には、私を一生懸命育ってくれたおじいちゃんやおばあちゃんがいて、一生懸命頑張ってくれているおじさんやおばさんのいることを忘れないように、今この勉強を真剣に進めていきたいと思います。

T 3：今、3人が語ってくれたけど、付け加えて発表してください。

HI(男)やっぱりまわりの環境が、部落に生まれたことを恥ずかしいように思わせていたんだと思います。それで、親とかも仕方なしに子どもの幸せを願うならという感じで恥ずかしいことだから、世間に出来ないように、かくすように教えていったんだだと思います。

T 4：差別が恥ずかしいと思わせていったということ。

2 差別意識を持っている自分に気づいて、恥ずかしがることが恥ずかしいことだと思うようになった

SE(女)部落の人たちはまわりの環境によって、部落は恥ずかしいという感じを植え付けられていました。それで、結局、差別はいけないとわかっても、部落を恥ずかしいと思うことは、自分に差別意識があるということだと思うから、差別がいけないということがわかって、差別意識を持っている自分に気づいて、恥ずかしがることが恥ずかしいことだと思うようになったんだだと思います。

T 5：自分自身の中に差別意識があったという発言についてどうだろうか。

YO(男)部落に生まれたことが恥ずかしいって思うようにしていったのは、まわりの人だと思います。小さい頃はそんなことを知らなかつたし、そんな恥ずかしいという思いはなかつたのだから、まわりの人によってそう思わされてきたと思います。

YI(女)私もEさんが言ったように、自分が部落に生まれたことを恥ずかしいと思うのは、自分の差別意識があるといふことで、部落といふことを侮辱しているから恥ずかしいと思うんだと思いました。

T 6：今のEさん、Iさんの発言についてどう思いますか。

SN(女)私も同じような意見なんだけど、自分が部落出身と聞いた時や部落出身でないと聞いた時に、ほっとしたりすごく悲しくなったりするのは、やはり自分の中に差別意識があるからだと思います。安心するのはやはり差別意識があつて、もし自分が部落だったらと考え、悲しみを背負った人の立場に立つことができないことだと思います。また、悲しくなって涙が出てくるのは、自分が差別するのはいけないと頭でわかっていても、そのようになってしまふのは、やはり差別意識があるからだと思います。

MM(男)Nさんの意見について同じみたいだけ付加えます。部落と聞いてなんか重苦しくなるのは、いくら勉強していくもあるし、やはりそのときは差別意識がむき出しになっているようにぼくは思います。今までに何度か学習してきたけど、真剣に取り組んでいるというのは中学校2年になってからで、真剣に取り組むことによって、部落に生まれたということが恥ずかしいことではないんだと学習によって段々とわかつきました。最初、部落に生まれたということがわかつたとき、大きなショックがあつて、そのショックが自分の中にある差別意識からきていると今までの学習の中からわかつたけど、まだまだ自分の中から差別意識が出てくることがあると思います。

YI(女)それじゃあ、M君は今、自分をどう思っているんですか。

3 自分をさらけ出すことによってもっと仲間を増やしていくことができる

MM(男)今はやっぱりまわりに仲間がいるし、本音で打ち明けることのできる仲間をつくっていきたいと思ってるから、自分をさらけ出すことによってもっと仲間を増やしていくことができると信じています。

T 7：M君の意見についてどうだろか。

TF(男)M君は自分の考えをさらけ出して、友だちとかが変わった目で見たらどうしますか。

MM(男)そのときは実際に変わったようでも、本当のことを語っていくことによって、日がたつにつれてより深い仲間というものができたように、今は思えるようになってきました。

YI(女)F君に言いたいんだけど、本当のことを言って見る目が変わる友だちはそれまでだし、本当のことをわかるとしてくれる人でなければ友だちとは言えないと思うし、本当の友だちをつくるためにも、自分が部落出身であることを言ってしまった方が、私はいいと思います。

MM(男)F君にぼくが公開授業で部落出身と言った時に、友だちの目が変わったような気がすると相談したことがあったんだけど、そのことを気にかけてくれていると思うんです。そのときは変わったような気がしたし、実際にも変わったように思うんだけど、今は段々その友だちとも、心をわかり合うことができるようになつてきたと思うんです。やっぱり自分をさらけ出したら、相手の心も開いてくれると思うし、今は心のつながりがなくなつて、みんなに部落出身であることを言ってよかったです。

TF(男)M君からまわりの目が変わったように思うと聞いた時には、ぼくもびっくりしたし、まさかM君みたいに堂々と語れる子が、気にしているとは思ってもいなかつたし、こんなに部落問題の勉強をしてきたのになんてかなあと思ったんです。まじめに頑張っていっても不安になる子ができるし、丸岡さんたちのようにみんなが「恥ずかしがることではない」という思いをしっかりつかんでいかなかかんと思います。

T 8：F君やM君の思いに寄せて語ってみてください。

SE(女)M君の意見についてなんだけど、自分が部落出身だと言つて差別するような仲間だったら、前も言ったけど、結局そんな友だちだったら、最初からつくらん方がいいと思います。部落と言つても、同じように頑

張ってくれたり、仲よくしていくことのできる友だちをつくることが大切だと思います。私は本当のことを言って離れていく友だちを10人つくるよりかは、本当の思いがわかり合える友だちが一人いた方がすばらしいと思います。

4 M君が部落に生まれたことを訴えることができたのは、やっぱり信頼できる人がいたから

SN(女)M君が部落に生まれたことを訴えることができたのは、やっぱり信頼できる人がいたからちゃんとと言えたんだと思いました。それなのに、部落だと聞いて、どうしてもその人の見方が変わる人は、その人に勉強不足のところがあったり、差別意識もあったと思うけど、その人もその人なりに自分の中にある差別意識とたたかっていたのではないだろうかと思いました。

T 9: 次のところを考えていきます。「部落の子が非行に走る、手におえなくなる。そのときにその子の裏側、差別の中に置かれている差別の実態を知って、その子の身になって考えていかなければならない」と丸岡さんは資料の中で訴えています。丸岡さんが部落問題の学習の中から、子どもの裏側、差別の実態まで、その身になって考えていかなければないと感じていったことについて、みんなの思いを発表してみてください。

KH(男)差のこと、部落に生まれたことなど、友だちの一番つらい部分を言ってくれる。ぼくはそんな友だちと本当の友だちになりたいと思います。口先だけでなく、その苦しみを自分のことのように感じていくことのできる仲間になっていかなければならないと思います。

MM(男)今まで学習してきた資料の中にあったと思うけど、地区外の子が悪いことをして非行に走っても、その子やその家だけの問題になっていくけど、部落の人が一人悪いことをしたら、部落全体を差別していくような社会があると思うんです。それは社会全体にまだまだ部落問題の学習が十分でないからそうなってしまうと思うんです。実際にぼく自身もこの学習に真剣に取り組み出したのは中学2年からだけど、差別する人は以前のぼくたちと同じように本当の学習がなされていないから平気で人を差別していく人間になってしまっていると思うんです。ぼくはしっかりとした部落問題の学習をしていくことによって、自分自身の中にある差別意識が段々と見えてきて正していくことができるようになるけど、しっかりとした学習がなかつたら、自分の差別意識は段々と大きくなっていくと思います。

YI(女)私も非行に走る裏側までわかっていくことが必要だと思います。表面で説教するのは簡単だけど、そこからは何も生まれてこないように思います。だけど、今の私の本当の気持ちは、どうして部落に生まれたということだけで、非行に走っていくのかはちょっとわかりません。やっぱりそんな考え方はあかんのだろうけど、自分の本音を言ってみました。

5 部落の中のだれか一人が悪いことをしたら、部落全員を悪いというように見ていくてしまう

SN(女)M君の話にもどるんだけど、私も、M君が言ったように、部落外の人が悪いことをしても、その子一人だけが悪いというんだけど、部落の中のだれか一人が悪いことをしたら、ああやっぱり部落は悪いという感じで、部落全員を悪いというように見ていくことがあると思います。部落にも、部落外の人にも、どちらにもいい人がいて一生懸命頑張っている人がいるのに、どうしてそんな見方しかできないんだろうかなあって、すごく恥ずかしくなることがあるんだけど、この勉強をしていくうちにこんな考え方は間違っているなあと言うことがわかって、前までは部落差別はなくならんと思っていたけど、みんなでこの授業に頑張っていくうちになくなるんだという気持ちに変わってきました。

HI(男)さっきから気持ちがごちゃごちゃになって、何を言ったらいいのかわからないところがあるんだけど、やっぱり非行に走る子は意志が弱かったんだと思います。差別と共に闘っていく友だちがいなくて、負け

てしまったところもあると思うけど、差別に負けて非行に走るというのは、自分が部落出身だということでお涙を流すということにつながっていると思います。

SN(女)この勉強をし始めて、家族でもよく話し合うようになったんだけど、部落の子が非行に走るということを前に家族で話し合った時に、部落の子が自分が部落とわかった時に3通りの道があるということをお父さんが言ったんです。3通りの道というのは、一つは部落ということをずっとかくし通して、いつばれるかわからないという感じでひやひやしながら生きていく道と、それともうどうなってもいいわという感じで開き直って悪いことをしたりする道と、もう一つが、差別は間違っているということを訴えて部落解放に向けて生きていく道の3通りに分かれると言ったけど、部落解放に向けて一生懸命取り組んでいく人の方がすばらしいなあと思います。

YI(女)私もNさんと同じ意見で、部落に生まれたということをつらがるんではなくて、反対にそのことをバネとして差別されるということに怒って頑張っていかなあかんと思います。

MM(男)だけど、実際に学習したからわかってきたようなもので学習がなかつたら、自分も部落解放の道には進まなかっただと思います。

YI(女)そしたら、M君は悪いことをするんですか。悪いことをしたらその分だけ、部落が悪いように見られるんと違うんですか。

6 授業を見にきてもらって、私たちの気持ちが広がっていけば差別はなくなる

SN(女)二人の言いたいことすごいわかるんだけど、やっぱりM君が言うように学習がいると思うんです。私もこの学習がなかつたら、間違った考え方でずっといたかもしれないし、部落の人が悪いことをすれば、また部落じやという感じでどんどん差別されていくというのはわかるけど、私たちが今、一生懸命勉強している人に授業なんかを見にきてもらって、見にきた人たちに私たちの気持ちを訴えることによって、見にきた人たちが家に帰っていろんな話をして、どんどん私たちの気持ちが広がっていけば差別はなくなると思います。

MM(男)さっきNさんが3通りの意見を言っていたけど、今、自分が進んでいるのは部落解放への道だと思うけど、もし学習がなかつたら、まあぼくは非行の道へはいかなかったとは思うけど、かくし通していたと思います。

T10：丸岡さんもそうでなかっただろうか。丸岡さんがふるさとの詩を書き、また様々な部落を語る、差別をなくすための詩を書くようになった。それは差別をなくすための学習があったからだと言う。そして、信じ合い、何でも話し合える仲間がいたから、堂々と差別解消に向けて自分をぶつけていくことができたと言われる。信じ合い、何でも話し合える仲間、これはみんなを見ていてしみじみ思うことです。この丸岡さんの思いに寄せてみんなが思うこと、感じることを語り合いましょう。

7 3年生になるまでは、自分が部落出身であることを絶対かくしていこうと思っていた

JK(女)私は3年生になるまでは、自分が部落出身であることを絶対かくしていこうと思っていました。でも、いろいろな資料を勉強し、みんなの意見を聞いて、その言っていることを本当だと信じたとき、この仲間だったら私の一番つらい思いを打ち明けることができると思うようになってきました。今、私は二人の友だちに自分が部落出身だということを打ち明けています。まだ二人しか本当の友だちはいないけど、これからはもっとたくさんの本当の仲間を増やしていきたいです。

T11：Jさんの思いを受けとめてほしいと思う。

YI(女)私もJさんにそのことを打ち明けてもらったんだけど、自分の一番苦しい部分を打ち明けてくれたんだ

から、私も心を開いて頑張っていかないかんと思うようになってきました。今、まだ二人にしか言えなかつたかもしれないけど、もっとクラスの中の人たちがJさんの気持ちを受けとめて、みんな今の時間を大切にしてほしいと思います。

MS(女)今、3年生でも、何人かの人が、自分が部落出身ということを全体学習なんかで言ったんだけど、今、Jさんが二人だけと言ったけど、ここにいる3Bのみんなの前や多くの先生方の前で言えたんだから、信じてくれたと思いたいです。私も部落に生まれたんだけど、恥ずかしいと思ったこと一度も…なかったけど…ほなけど言うて差別されたらいやじやと思うてずっと言えんかったけど、このクラスの子だったら、信じることができるとこのことが言える。

8 本当の「親友」とは「心の友」、そんな「心友」をたくさんつくりたい

SE(女)KさんとSさんが言ってくれたけど、これから今日打ち明けたことを後悔するようだったら、私やはいつたい今まで何をしてきたなんと思ってくれていいと思います。私も部落ということを言うた子を変な目で見ようなんて一つも思うてないし、見たらごつい自分があほらしいなってくると思います。それで、この前読んだ本で心に残っていることなんだけど、一応世間で言う「親友」とは、「親しい友」と書いて何でも話し合える友だちということだけと、本当の「親友」とは、「心の友」と書いて自分の恥ずかしいところでも、何から何まで端から端まで話し合える友だちを「心友」というそうです。私もそんな「心友」をたくさんつくりたいです。

CK(女)私も部落出身ですが、このクラスのみんなだったらこのことが言えると思います。この前友だちに自分が部落出身ということを打ち明けたら…「ほんなん関係ないでえ」と言ってくれました…。私は本当の友だちがいたんだということがわかったのでよかったです。

KK(女)私はさっきAさんの学習プリントを見せてもらったんだけど、最初見せてと言ったとき、いやいやと言っていたけど、KKさんだったら信頼できるけんていうて見せてくれたんです。私が信頼できる友だちになつていかないかんだと思います。

T12：みんな二人の発言をどう聞いたですか。

M0(女)私もAさんに打ち明けてもらったんだけど…。

T13：Aさんの分もがんばらな。

M0(女)信頼してくれていると言ってくれたんだけど、まだまだ力になれていない…。もっと勉強して、Aさんの力になっていくことのできる人間になりたいです。

KU(男)まだ発表もできないずっと座っているだけなのに、みんな信じてくれて発表してくれるのに、自分はこんなことしよっていいんだろうか。このクラスの子を信じて発表してくれるのにこんなことしよっていいのかと思いました。

SN(女)私はちょっと前に、まだこの勉強をし始めて少ししかたっていない時に、ある友だちから部落出身じやということを打ち明けられて、なんとなくわかっつたんだけど、本人から聞いてその子泣いていたし、シヨックだって、夜とかあまり疲れなかったんだけど、そのことを打ち明けて涙を流している子を見たら、腹が立ってきてこういうふうにその子をここまで追いやる差別を許せないと思います。

KT(女)私も部落出身ですけど、泣いている子を見たら泣いてほしくありません。そして、その泣いている外側だけ見てほしくありません。悲しみが深いから涙が出てきて止まらないんだけど、この悲しみや苦しみがわかっている友だちがこのクラスにいっぱいいるし…。本当は今、泣きたいんだけど、涙をこらえています。

9 これから学習によって涙は出てこなくなる

MM(男)やっぱり自分から心を開くことによって友だちも心を開いてくれるということが、今、本当にわかってきたと思います。心を開くことにより信じ合う友ができる、お互いに本音で思いをぶつけ合うことができると思います。お互いに涙が出るというのは、涙を流す友だちの気持ちはわからないことはないけど、これからの学習によって涙は出てこなくなると思います。実際にぼくもこのクラスでは、信頼している友はたくさんいるし、全体的にも友だちはたくさんいる方だったけど、表面的な友だちがほとんどで本当に信じ合った友だちはあまりいなかったと思うんです。でも、この学習によって、信じえる友だちがぼく自身の中で増えていったと思います。自分から心を開くことによって、まわりの人も心を開いてくれたことが本当にうれしいです。心開いてもまわりに反応がないんだったら、少しもおもしろくないと思います。この頃、公開授業や全体学習のある場面で口先だけでいい意見を言ったって、公開授業や全体学習の別の場面で寝ていたりする子が目に入ったら、とても腹が立ってめったに怒らんつもりなんだけど、自分でも押さえきれんぐらい腹が立つ時があるんです。でも、押さえないかんと思って押さえています。みんなも頑張ってほしいと思います。

10 部落解放の道に進んでいって、気軽に部落の人間と言えるような社会をつくっていきたい

HI(男)ぼくも部落の人間です。今までこのクラスにもそのことをわかってくれる友だちはいないと思っていたけど、「みんないいなあ」と思いました。森口先生に家庭訪問の時に「お前は部落の人間だ」と言われたとき、自分には差別意識がないと思っていたけど、実際にありました。それで、この授業では泣かないと思っていたけど泣いてしまいました。これからこれをバネとして部落解放の道に進んでいって、気軽に部落の人間と言えるような社会をつくっていきたいです。

SE(女)みんな泣きながら語ってくれているのに、涙が出てこん自分に腹が立つんだけど、心の中は泣きたい気持ちでいっぱいです。話は最初にもどるけど、OさんがさっきAさんの力になれないと言ったけど、みんな部落出身だと打ち明けた後も、いつも通り接していくことじたいが、その子の力になっていっしょに闘っている証拠だと思います。

YI(女)私もOさんの意見についてだけど、私も、OさんはAさんの力になれていないと言っていたけど、ここで手を挙げて発表することがその人を支えていくことなんだと思います。今日一度も発表していない人がいると思うけど、ここで座ってお客様のまま終わったら、みんながこうやって心を開いてくれているのに、その人の気持ちを踏みにじることになっていくと思います。絶対一度は発表してどんなことでもいいけど、その人の思いに応えてください。

KO(女)みんなの前で涙を流して発表している子を見ていたら、涙を出したいんだけど、心の中で泣いているけど、涙が出てこないという感じです。授業を今のうちにやっておかなければ、その人たちを自殺に追いやるかもしれないから、今のうちにみんな心を開いて、この学習を頑張っていかなければいけないと思いました。

MM(男)ぼく自身、あまり人の涙を見るのはいやなんだけど、人の涙によって、自分の心の中になんか突き刺さっていって、これから発表とかのエネルギーになるものがいっぱい生まれているように思います。涙を流してまで言ってくれるのはうれしくて、ぼく自身も泣きたい気持ちになっているし、みんなも涙を流して語ってくれる仲間の思いが心の中に突き刺さっていると思うから、どんなことでもいいから、まわりの人に、その思いをどう受けとめたか発表してもらいたいと思います。

11 信頼してくれている人に何でもいいから応えてほしい

SN(女)みんなこんなに一生懸命になって発表しているのに、どうして下を向いていられるのかと思います。信

頼されているんだから、何か言いたいという気持ちはみんなあるんだと思うけど、信頼してくれている人に何でもいいから応えてほしいです。

MT(男)みんながぼくらのことを信じて真剣に発表してくれるのに、ぼくはその思いにあまり応えられていないので、これからは手を挙げて堂々と発表できるように頑張りたいと思います。

KK(女)IさんやNさんの意見に付け足すようになると思うんだけど、一回も発表していない人は、みんなが泣きながら訴えているのに何も感じないんですか。何か思っているんだったら、手を挙げて発表してください。

RH(男)ぼくは親から部落のことを聞かされて、中学校に入る前は部落というのがすごく恐かったんだけど、中学校に入って部落の友だちができたんだけど、みんないやつばかりで、ほんまに部落差別を壊さないかんなあと思いました。

KM(男)ぼくは今までほとんど自分のことばかり考えていて、友だちが部落だといつてもあまり真剣に考えていました。今日の授業でもみんな泣きながら自分のことをどんどん言っているのに、支えることのできない自分がすごく情けないです。今回の発表をバネとして、みんなに応えられる人間になるように、これらの授業でどんどん発表して信頼し合える仲間をつくりたいと思います。

HM(男)今まで発表してくれた子は、ぼくや他の子を信じて発表してくれたのに、今までぼくは心が重苦しくなって発表できなかつたので、この授業を土台として部落差別を壊して重苦しくない社会をつくっていく一人になりたいと思います。

12 どんどん発表できないのは、自分の心の中にまだ差別意識があるからだと思う

MI(女)今まで自分のことを打ち明けてくれた人に対して、ずっと私はうつむいてばかりいたんだけど、今まで学習てきて本当に自分自身の心から自分の一番つらいことを言えるのは、まわりが信頼できるということで、Nさんがさつき言っていたけど、みんな信頼されていると言ってくれて、私も信頼されているのかなあと思って、だけどどんどん発表できないというのは、自分の心の中にまだ差別意識があるからだと思います。これからもこの差別意識と闘って発表していきたいと思います。

SF(女)私あまり人の涙は見たくないんだけど、私たって、中1のときは泣きたかったし、今までだって我慢してきたし…、差別っていうのはつらいから…、中1のときに味わった思いはもう二度と味わいたくない。差別に苦しむ人の姿も見たくない。みんながそんな苦しみを味わうことのないように頑張って勉強していくと思います。

KN(男)みんなは信頼してくれているけど、ぼくにはまだ信頼される程の力はないと思います。みんなに信頼されている限りは、みんなの期待を裏切らないように差別をなくすために頑張りたいです。

T14: 時間がきました。最後に委員長まとめてくれるか。丸岡さんとは、みんなにとって何であるのか。丸岡さんの生きざま、生き方を学習してきたことは何であったのか。

13 みんなが頑張ることにより、私も頑張らないかんと思う。私の一番中心はみんな

YI(女)先生にとって丸岡さんとか、みんなにとって丸岡さんとかは、すごい人かもしれないけど、私にとって丸岡さんというのはただのおじさんです。私の丸岡さんは、みんなであり、先生であり、みんなの丸岡さんは、みんなであり、先生であり、みんなが悲しむことにより私も悲しくなり、みんなが頑張ることにより、私も頑張らないかんと思う。私の一番中心はみんなです。この勉強をするにあたっても絶対みんなを泣かさたくないと思います。みんなが笑ってちゃんとやっていけるようになるまで、ほんまにみんなで頑張っていかなかんと思います。みんな頑張りましょう。

T15: 終わります。